

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# はじめに

著者	光永 雅明
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	85
ページ	1-3
発行年	2013-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001345/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001345/</a>



# は じ め に

光 永 雅 明 (研究班代表)

イギリスが世界的なヘゲモニーを獲得してゆく過程で、本国で着実に広がっていったのが、西欧社会、とくにイギリスを「文明社会」の頂点ととらえる理解である。中でも 19 世紀になると、古代から続いた中国やインドの社会さえも、イギリス社会より文明的に劣ったものと理解されるようになった。<sup>1</sup>

イギリスを「文明社会」の頂点と捉える見方としばしば並行して広がったのが、イギリス人にとっての「他者」の存在を想定して、それとの対照によって「自己」を理解しようとする考え方である。たとえば「イングランド人らしさ」に関する自己理解は、「敵」である「他者」を排除するという過程を通じて形成されていった。その意味での代表的な「他者」は、18 世紀においてはフランス人であり、19 世紀においては帝国に住む様々な人びと、とくに非白人だったのである。<sup>2</sup>

したがって「文明社会」の頂点にイギリスが立つとの自己意識は、しばしば「他者」の排除——そこには、たとえば「他者」の否定的な表象も含まれる——と表裏一体になって広がっていったとも考えられよう。また「他者」はイギリス国外にいるとは限らない。たとえば 1860 年代以降のイギリスでは、海外の非ヨーロッパ人への態度がより硬化してゆくのと並行して、国内の「犯罪者」や子どもに対する態度がより権威主義的になっていった。<sup>3</sup> 規範から逸脱する人びとを「内なる他者」として把握する見方が広がっていったとも考えられよう。

しかしながら、以上のような「文明社会」の「他者」に関する近年の見方には、批判も生まれてきている。たとえば「他者」へのイギリス側の理解はしばしば否定的・批判的なものが強調されるが、「他者」への積極的な評価が自己のステレオタイプの認識を進めることもありうる、とピーター・マンドラー

1 Ronald Hyam, *Britain's Imperial Century, 1815-1914: A Study of Empire and Expansion*, 3rd ed. (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002), pp.74-77, 105-123.

2 このような「他者」に関する見方が近年のイギリス史研究で広がってきたことについては、下記を参照のこと。Peter Mandler, *The English National Character: The History of an Idea from Edmund Burke to Tony Blair* (London: Yale University Press, 2006), p.53. なおマンドラー自身は、後述するように、かかる見方には批判的である。

3 Hyam, *Britain's Imperial Century*, p. 163.

は言う。<sup>4</sup>「自己」を「他者」との単純化された関係から構築されたものと見なす歴史理解に警鐘を鳴らす、J. G. A. ポーコックの議論も想起される。<sup>5</sup>すなわちイギリスは「文明社会」であるとの自己認識があり、またそれは「他者」の排除に支えられていたという歴史理解を、どのように今後、批判的に発展させ、ないしは克服するかが現在、問われているとも言えよう。

本研究班は以上のような研究状況に鑑み、「文明社会」の「他者」に関するイギリス本国における理解を、できるだけ具体的な主題に即して多角的に検討することを目標としている。すなわち本研究班は、「文明社会」にとっての「他者」と理解されがちであった、異国の人びと、黒人奴隷、逸脱的と見なされた若年層、そして動物を取り上げ、それらに対するイギリス（ないしイングランド）における理解を順次検討していった。なお、本研究班では様々な人間集団に対する理解を主として検討したが、ヴィクトリア時代における動物への理解は、一部の人間を「獣的」「動物的」とする見方とも不可分であり（光永論文を参照）、本研究班での検討対象に加えている。本研究班の成果は以下の各論文に示す通りであるが、それに先立ち、各論文の内容を簡単に紹介しておきたい。

まず「近世イングランドにおける日本像——ピーター・ヘイリンを中心に」（指昭博）は、上述のような「文明社会」意識がイギリス側で十分に醸成されておらず、アジア文明へのある種の畏怖さえあった近世イングランドにおける日本理解を検討する。具体的に取り上げるのは、17世紀のふたりの宗教者、ピーター・ヘイリンとアレクサンダー・ロスの著作である。反ピューリタン聖職者ヘイリンの日本紹介には、その情報をピューリタン批判に利用しようという意図が見られるが、ピューリタンであったロスの著作では、事実関係が客観的に紹介されるだけであり、両者は対称的な立場を示していたのである。

次に「イギリスにおける反奴隷制運動と女性」（並河葉子）は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリスにおける反奴隷制運動を取り上げる。より具体的には、反奴隷制運動に大きな役割を果たした女性たちの主張を分析し、彼女たちの奴隷制批判の根拠が男性のそれとはどのように違っていたのか、その理由は何か、また、ハナ・モアのような穏健な社会改革を目指した福音主義

4 Mandler, *The English National Character*, p.53.

5 J. G. A. Pocock, *The Discovery of Islands: Essays in British History* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2005), pp.309-310. エドワード・サイードによるオリエンタリズム論は「自己」と「他者」との「二項対立」的な理解に基づくという、ジョン・M・マッケンジーによる批判も参照のこと。John M. MacKenzie, *Orientalism: History, Theory and the Arts* (Manchester: Manchester University Press, 1995), pp. 208-209; ジョン・M・マッケンジー（平田雅博訳）『大英帝国のオリエンタリズム——歴史・理論・諸芸術』（ミネルヴァ書房、2001年）、329-330頁。

の女性と、よりラディカルな立場にいたエリザベス・ヘイリクのような女性とともに反奴隷制運動で提携できた理由は何か、そして、それぞれの見解の相違はこの運動の中で表面化したのかを検討する。

また「世紀転換期イギリスにおける青少年問題と退化論」（吉村（森本）真美）は、法や社会規範から逸脱する青少年に対する、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリス国内の認識を検討する。その認識プロセスに大きな影響を与えたのが、同時代のイギリスを広く覆っていた、退化（degeneration）への恐怖感であった。本論文ではとりわけ青少年という年齢集団と退化概念が強く結びつけられて議論されたことに注目し、20世紀初頭に隆盛をみる青少年団運動の展開へのその影響を探る。

最後に「「文明社会」における動物たち——ヘンリ・S・ソルトによる動物の擁護」（光永雅明）は、「動物の権利」論の先駆者としても知られるソルトによる、動物擁護の議論を取り上げる。ソルトはまず同時代のイギリスが「文明社会」であるとの見方を批判し、同時に動物は人間とある意味では平等であると主張した。本論文はこの主張を検討し、そこにヴィクトリア時代における自由主義思想とのある種の類似性が窺えることを示す。

もともと、研究班構成員が対象とする専門領域上の制約もあり、本研究班は、イギリスにおける「文明社会の他者理解」の変容について、いくつかの主題に即して限られた角度から検討したものにはすぎない。その他の点も含め、本研究成果の不十分な点については、忌憚のないご批判をいただければ幸いである。

なお本研究班の活動並びに研究成果の刊行にあたっては、神戸市外国学大学外国学研究所から多大な支援をいただいた。記して感謝申し上げたい。